

福島県立博物館美術分野が携わっている文化による復興支援事業

川延安直

Cultural projects initiated by the Fukushima Museum Division of Art to support reconstruction in the wake of the Great East Japan Earthquake

Yasunao KAWANOBE

福島県立博物館では、東日本大震災・東京電力原発事故以後、文化による復興支援事業に携わって来た。震災以前、2009年に「岡本太郎の博物館はじめる視点 博物館から覚醒するアーティストたち」展を開催。これを機に県内外アーティストとの交流・連携が生まれた。2010年から始まった「会津・漆の芸術祭」は地域との連携を重視した活動を評価され2011年には「地域創造大賞総務大臣賞」を受賞した。これらの蓄積が、震災以降の文化による復興支援事業に大きな力となった。

第2回の「会津・漆の芸術祭」は震災のため開催・中止の決定がなされないまま、時間が経過した。この間、芸術祭事務局ではサブタイトルに「東北へのエール」を掲げ、HP上で東北を支援する気持ちで寄せられた作品・作品プランを募集・公開した。その後、「会津・漆の芸術祭 2011」は開催が正式に決定し、「東北へのエール」に寄せられたいくつかのプランは実際の作品として制作・公開された。この頃から、さまざまな文化による復興支援事業も動き始め、福島県立博物館美術分野はその調整と支援に動きだした。ここでは2011年を中心に2012年までに行われた主な事業を紹介する。

●ハートマークビューイング (HMV)

震災後いち早く立ち上げられたプロジェクトの一つにアーティストの日比野克彦氏による「ハートマークビューイング (HMV)」がある。布片を縫い合わせて作ったハートマークをつなぎ合わせ、タペストリーなどにしていくワークショップである。心や気持ちの象徴であるハートマークで、被災地への思いを形にする。また、手作業とその際の会話により被災者の心に潤いを与えることを目的としている。

日比野氏との打合せの結果、有志のグループ「ハートマークビューイングふくしま」を結成し、「会津・漆の芸術祭」参加企画として実施。6月には会津若松市内の二次避難所となっていた東山温泉の旅館で初めてのワークショップを行った。活動はその後にも継続し、猪苗代町内の双葉町の二次避難所、会津若松市内の大熊町住民のサロン、喜多方市山都中学校、「会津・漆の芸術祭 2011」や福島県立博物館で開催されたイベント等でワークショップが実施された。2011年末からは、会津若松市内大熊町仮設住宅6ヶ所、会津美里町内の檜葉町仮設住宅で連続開催。素材に会津木綿や県外の高校から届いたハートマークも用い、会津大学短期大学部の学生が参加するなどして、その作品を「元気ですフラッグ」として制作した。その後も、南相馬市・福島市・郡山市で開催するなど活動は広がりを見せている。仮設住宅での交流の時間、イベントのメニュー、さらには新プロジェクト展開のきっかけとして機能している。2012年3月の「六本木アートナイト」では、東京での参加者も

加わって「元気ですフラッグ」を制作。完成したものは会場で「ハートマークビューイングふくしま」のメンバーに贈呈された。その後、社会福祉協議会を通じて、2012年6月「元気ですフラッグ」は大熊町仮設住宅入居者の方々に贈呈された。

●会津・漆の芸術祭 2011

「会津・漆の芸術祭 2011」は2011年10月～11月に開催された。「東北へのエール」をサブタイトルに掲げ、基本テーマである「漆」に関わらない下記のような参加型ワークショップも多く実施した。

- ① FUKUSHIM ART プロジェクト
- ② ひとてま
- ③ ハンドツリーアートプロジェクト
- ④ しでかす！つながる！Tシャツプロジェクト

①は、いわき市在住のアーティスト吉田重信氏のプロジェクト。各地で行うワークショップでは、参加者が青・赤の鳥のシルエットをプリントしたポストカードにメッセージや絵を描き、表には届けたい場所や人のアドレスを記入する（任意）。ポストカードはインスタレーション展示され、その後各地に飛び立つ（郵送される）。同プロジェクトは現在も継続し、関西・東京に福島現状を伝える活動に発展している。

②は、茨城県在住の陶芸作家塩谷良太氏のワークショップ作品。粘土玉を手の中にはさんで二人の人が握手する。玉には二人の「人・手・間」の握手の形が残る。人のきずなによって生まれた形は焼き上げられ箸置きとなる。握手の形が残され食卓を飾る。柳津町の温泉旅館に二次避難していた葛尾村の避難者と柳津町の方々がワークショップに参加した。数日後には仮設住宅に移るという状況で行ったため、葛尾・柳津両住民の良い思い出になったと好評を得た。

③は、神戸ビエンナーレ出品アーティストの酒井正氏が行った。参加者の手形を切り抜いたビニールシートを葉に見立て、大きな樹の梢を作っていくワークショップ。会津若松市や猪苗代町の避難所で行ったワークショップをもとに制作されたハンドツリーは神戸ビエンナーレにも展示された。

④「しでかす！つながる！Tシャツプロジェクト」は、着ぐるみアイドルユニット・しでかすおともだちによって実施された。キャラクターがプリントされたTシャツを着て参加者同士が肩を組むとキャラクターも手をつなぐ。Tシャツを着ることにつながりを感じられるワークショップ。被災地での制作をその他の地域の販売でまかなう運営上の工夫もされていた。

以上のような人の交流と制作への参加を目的としたワークショップに加え、「会津・漆の芸術祭」の主催事業でも福島現状や復興を考えるイベントを積極的に組み込んだ。

- ① シンポジウム「ふくしまで語る FUKUSHIMA」
- ② トークイベント「残せるかふくしまの未来～絵本の力～」

③ CINE 上映+トークイベント「REQUIEM」

④ トークイベント「アートにできること・できたこと 2011」

①は震災から4ヶ月という早い時期、東電原発事故の影響がますます広がる中で、港千尋氏・やなぎみわ氏・三瀬夏之介氏が福島と東北の現状についての感想を語り合った。

②は、絵本作家あべ弘士氏・飯野和好氏・ささめやゆき氏をお招きし、絵本というメディアを通じて原発を生んだ現代のライフスタイルの問題点、そして未来の展望が力強く語られた。

③は、現代詩人・吉増剛造氏と赤坂憲雄福島県立博物館長が吉増氏の新作詩集をもとに対談した。震災・津波からの復興を日本文化の古層から解き明かす濃密な時間が流れた。

④には、吉田重信（FUKUSHIMA ART プロジェクト）・渡邊晃一（福島大学准教授）・北澤潤（マイタウンマーケット）の3氏が震災後半年間のアートによる復興支援活動について語り合った。

これらは、ボイスライトをHP上に公開するとともに「会津・漆の芸術祭 2011」報告書に掲載した。震災の年に起こったこと。震災に関連する思考・証言を記録する。それも、博物館・芸術祭の重要な役割であると考えている。

●福島芸術計画×Art Support Tohoku-Tokyo

Art Support Tohoku Tokyo (A S T T) は、東京都・東京歴史文化財団の文化芸術による被災地復興支援事業である。震災後、岩手・宮城・福島の被災3県で実施されている。福島県での事業展開にあたり、7月以降、福島県立博物館と東京都で事業内容を構築していった。会津・漆の芸術祭と並行して準備は行われ、中通り・浜通り・会津の3地域の特性と被害状況を考慮し、下記3事業を行うこととした。

① 週末アートスクール…放射線量の低い会津地方の文化と自然に触れながらアートを楽しむ。週末の気軽な一時避難としての参加も可能。

② までの心プロジェクト…全村避難となった飯舘村が村づくりの柱としていた「までの心」の心を支援する。主な会場は福島市・喜多方市

③ 南相馬アートのあそびば…放射線量で市域が分断された南相馬市にアートの健全な遊び場を作るプロジェクト。

①は2011年10月以降、西会津町、三島町、喜多方市で年6回程度実施している。実施の過程で現地NPOと福島県立博物館との連携が強化された。

②では福島市でシンポジウム「+（プラス）アートのまちづくり」、喜多方市で「までの心」と題して、映画上映・コンサート・トークイベントを行った。

③は、7名のアーティストが南相馬市に集まり、アートワークショップの実演や仮設住宅でのワークショップ、そして市民をまじえてのフォーラムを行った。

こうした昨年度の実績を踏まえ、2012年度は福島県も積極的に事業に参画し、福島県と東京都の連携共催事業「福島芸術計画×Art Support-Tohoku Tokyo」としてより広範な活

動がスタートした。県内各地で行われていた文化による復興支援事業の点がネットワークを形成しつつあるのは、昨年からの本事業の大きな成果である。

●平成 24 年度文化芸術振興費補助金（文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業）ミュージアム活性化支援事業「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」

震災後、多くのアーティストが被災地東北・福島県内で自主的に復興支援活動に従事し、制作活動を行っている。本プロジェクトでは、そうしたアーティストと福島県の文化遺産を結びつけるための視察のサポートや、文化財関係者とのコーディネート、作品発表のサポートを行っている。現在の福島県を体験したうえで制作された作品や地域との関係は新しい文化となり、やがて一つの観光資源となりえるものと期待する。

2012 年度は下記のプロジェクトを支援しているが、文化庁からの補助金交付が国政の混乱のため大幅に遅延し、予定通りの実施を阻害している。

- ① Reflection 9 人の視点
- ② Distance/Continuity 隔たり/連なり
- ③ ふくしまダンスプロジェクト「安達ヶ原」
- ④ 岡部昌生 フロッタージュプロジェクト in 南相馬
- ⑤ 開発好明 北屋形獅子舞プロジェクト
- ⑥ 山本伸樹 復興ダルマプロジェクト
- ⑦ 丸山芳子 精神の北プロジェクト

①は、写真家・瀬戸正人を中心とした 9 名の写真家が震災後の福島・東北で撮影した写真を展示する写真展。被災地仮設住宅での撮影ワークショップ。地域の伝統的建造物・祭礼等を被写体を選び文化財への関心を喚起することにも留意する。会津若松市・喜多方市・南相馬市で開催。

②は、写真家・美術評論家・港千尋とフランス在住の画家・マリ・ドウルエのコラボレーション展。飯館村・南相馬市・喜多方市など県内各地で撮影された港の写真をもとにマリ・ドウルエが福島とフランスの風景を融合した絵画作品を展示。喜多方市・南相馬市で展示され、南相馬市で講演会、福島市でフォーラムが開催された。

③は、福島大学准教授・渡邊晃一を中心に福島に伝わる伝承「安達ヶ原」を素材に新たなダンスパフォーマンスを制作する。今年度は県内での現地調査を重点的に実施し、会場・史跡等の視察・会議開催を支援する。

④は、美術家・岡部昌生がフロッタージュによる制作を南相馬市の市民とともに行う。南相馬市博物館との連携で双相地区の歴史・地理・自然を学びながら、地域住民とのワークショップ、対話を重ね、あわせて学芸員とのフォーラム等を開催。

⑤は、震災以前からの過疎化・高齢化によって継続が危ぶまれている南相馬市北屋形の獅子舞に美術家に関わることで、祭礼の継続の可能性を探る。祭礼保存のみならず美術表現に親しむ造形ワークショップなども現地で実施する。

⑥は、白河・三春をはじめ福島県内で制作されている伝統的なダルマの展示・紹介。「復興ダルマ」の創作ワークショップ開催によって自立支援施設・仮設住宅等での継続的制作を目指す。

⑦は、東北の生活・伝承・思想について考え・語り合う場を継続的に設け、研究者・地域住民が交流し日本の「北」に位置する東北・北海道地方について学び、自らの郷土に誇りを持つ機会とする。喜多方市の登録有形文化財の蔵を活用して展覧会を開催した。

ここに紹介した事業は二つに分けることができる。福島県立博物館が企画立案し実施しているものと各事業の主催者・代表者が企画立案し福島県立博物館がその実施にあたって支援を行ったものである。震災後、被災地には多くの支援プロジェクトが持ち込まれ、中には被災者の生活の妨げになる場合もあったと聞く。逆に実施されれば有意義であったろう事業が実施に至らなかった場合もあったのではないだろうか。こうした混乱は文化による復興支援事業を適切に展開するための整理調整を行う窓口機関がないことに起因する。そうした中で、被害の軽微であった福島県立博物館には強力ではないが、支援する余力があり、出来るだけ多くの良質な文化事業を支援することは今の福島県に絶対に必要なことであるとの確信が美術分野の学芸員にはあった。

地域の博物館は地域の過去の文化を探求することだけが使命ではない。地域の文化を地域とともに育てていくことも重要な使命であろう。保存・調査研究・展示という博物館の三本柱は震災後現状維持の状態であるが、今しばらくは地域文化に風を吹かせる活動を選択したいと考えている。